

東京都渋谷公園通りギャラリー

交流プログラム「渋谷ラジオ」

令和5年度番組「ふたたび交わるおどろき」

ゲスト3: 福森伸さんをお招きした回のうち、#9のテキストです。

【「渋谷ラジオ」「ふたたび交わるおどろき」とは】

○佐藤真実子 皆さん、こんにちは。

東京都渋谷公園通りギャラリーでは、音声コンテンツを配信するプログラム「渋谷ラジオ」をお送りしています。このプログラムは、ギャラリーの学芸員が気になるテーマを設定し、作家や専門家に限らず、様々な人をゲストに招き、生の声を伝えます。

令和5年度は「ふたたび交わるおどろき」と題した番組をお届けしています。2020年に開館後、新型コロナウイルスに翻弄され、共に歩んだと言えるギャラリーですが、まずはそのスタート地点であるグランドオープン記念事業の展覧会「あしたのおどろき」に関わった皆さんをゲストに迎えて、この3年間の歩みを一緒に振り返ります。時間を経て再び交わるからこそ出会う新しいおどろきを声に乗せてお届けします。

当館の愛称とも言える「渋谷ギャラ」と「ラジオ」を組み合わせた「渋谷ラジオ」、ぜひ気軽にお楽しみください。

【ゲスト 福森伸さんの自己紹介と社会福祉法人太陽会しょうぶ学園について】

今年度の番組「ふたたび交わるおどろき」のナビゲーターを務めるのは、私、東京都渋谷公園通りギャラリー学芸員の佐藤真実子です。

そして、今年度最後、三人目のゲストは、鹿児島市にある社会福祉法人太陽会しょうぶ学園の統括施設長の福森伸さんです。福森さん、よろしくお願いします。

○福森伸 よろしく申し上げます。

○佐藤 これまでの回では、ゲストの方にギャラリーにお越しいただいてお話を伺うスタイルだったんですが、今回は私がしょうぶ学園さんにお邪魔して、いろんなお話を伺いたいと思っています。この番組では初めての出張収録となりますね。ですので、これまでの回とはまた違うライブ感というのを一緒にお届けできるかと思っています。

今回、福森さんにお話を伺う理由は後ほど詳しくお話するとして、まずは福森さんご自身に社会福祉法人太陽会と、そしてしょうぶ学園のご活動などを含めて、簡単に自己紹介をしていただ

きたいと思います。それでは福森さん、お願いいたします。

○福森 はい、よろしくお願いします。ここの施設は、障害者の支援施設ということで、法人名を太陽会と申します。太陽会は、ちょうど50年前に鹿児島で国体が行われまして、そのときの鹿児島国体の名称が「太陽国体」ということで、その太陽国体の「太陽」を取って、設立年に合わせまして太陽会と名づけてあります。

私は二代目ということになるんですけれども、先代の父親が理事長として設立したのが1973年です。私自身は1984年、ちょうど40年目になるんですけれども、しょうぶ学園に入職いたしました。それまでは、東京のほうにしばらくいたこともありますけれども、フリーターといいますが、そういうことも経ながら、この職場にたどり着いて、もうはや40年というところであります。

自己紹介といっても、経歴はそんなにないので、ここばかりなので世間知らずではありますけれども、学生時代はラグビーとかをしておりまして、料理の仕事だとか、アルバイトを経ながら、その経験生かしつつ、現在の活動に至っているという経緯もあります。

○佐藤 結構、渋谷にもちょっとお住まいになっていたことがあるとか、ないとか。(笑)

○福森 そうなんです。渋谷公園通りギャラリーのすぐ近くに住んでいたことがありまして、そこでアルバイトをして、コックをしていた時代もありますね。懐かしいというか。

○佐藤 ええ、そういうご縁もちょっと感じちゃったりしています。

じゃあ、後でまた50年の軌跡というのは、ちょっと後ほど詳しくお伺いしようかなと思うんですけれども、こちらの法人の太陽会ができて、そしてしょうぶ学園として、今、割とたくさんの方に知られているかと思うんですけれども、運営していらっしゃる施設としては、入所施設とかも運営していらっしゃると思うんですけど、どういった施設を全体としては運営していらっしゃるんでしょうか。

○福森 施設の概要としましては、知的障害の大人の施設で、定員で40名の方が入所されているので、24時間ケアを行っているという施設で、それに併設いたしまして、デイサービスセンターといいますが、通いの施設「Doしょうぶ」というのがあります。それから、その中に就労支援事業B型という、就労を中心にした事業がありまして、地域の中にはグループホームというのがありまして、そちらは定員50名で、約10軒ぐらいのホームが地域に点在していると。総勢、通いの方を含めて、利用者は150人、160人ぐらいの方が登録されていって、日々創作活動などを行っているというところなんです。

【大きなテーマ:ふりかえる／「あしたのおどろき」としょうぶ学園】

○佐藤 たくさん施設とか、入所施設も含めて運営されているんですけれども、しょうぶ学園さ

んの基本というか、非常に特徴的な活動というのは、やっぱり創作活動にも非常に多くの方の注目が集まっているかなと思いますね。それに力を入れてこられたということも、もうちょっと後で詳しく聞こうかなと思うんですけれども、そういったことが関連して「あしたのおどろき」の関係につながるわけなんですけれども、その前にいつも、今回のトークのテーマをお伝えしているんですけれども、このトークの大テーマ、大きなテーマというのは「ふりかえる」ということがテーマになっております。

最初の説明でもお伝えしましたとおり、今年度に関しては、私たちのギャラリーのグランドオープン記念事業の展覧会、いわゆる開館展ですね、オープンするときの最初の展覧会ということで、「あしたのおどろき」というのを軸にしています。

「あしたのおどろき」とこちらのしょうぶ学園さんの関わりというのは、2つありました。1つ目は、出展作家としてですね。布の工房、こちらの何個かある工房のうち、布の工房の活動から生まれた「nui project(ヌイプロジェクト)」から3名の方にご参加いただいたということが1つの関わりです。2つ目の関わりというのが、その「あしたのおどろき」の関連イベントでスペシャルセッション、まあライブなんですけれども、タイトルが「あさっての音の発見」というセッションを計画していて、そちらがこのしょうぶ学園さんの音のパフォーマンス集団である「otto & orabu(オット・アンド・オラブ)」さんから特別に編成された6人メンバーの「ottotto(オットット)」の皆さんのご出演をお願いしていたんですね。ですが、残念ながら新型コロナウイルスによる緊急事態宣言と臨時休館によって、このセッションというのは本当に直前、たしか1週間よりもっと切っていたと思うんですけれども、直前になって中止となってしまいました。こういった2つの関わりがある貴重な関係者のお一人である福森さんと一緒に、特にコロナ禍の3年間を中心に、いろんなことをふりかえるというのが目的となっています。

やっぱり混乱だとか何かが起こっている真っ最中、渦中というのは、そのことに目いっぱい、ふりかえるということはなかなかできないなと思っていて、ちょっと時間を経て振り返るほうが、同じ出来事も違って見えたりするかもしれないと私は思っていて、この番組では、そういった新しい発見とかおどろき、「あしたのおどろき」にかけているところもあるんですけど、そういったことに出会えることを期待しています。

これまでの回、ゲストの方では、ギャラリーの今とその方、ゲストに交わっていただくというのが割とよくというか、このお二方に関してはそうだったんですね。ですので、そのときに開催している展覧会を見ていただいて、その感想を言い合うということを最初に行っていたんですが、今回は、私が今もうしょうぶ学園さんにいますので、しょうぶ学園さんの今を私と福森さんでお話ししながら、

一緒にふりかえってみたいと思います。

福森さんには、今日、この収録の前に、施設、工房とか、様々なところをご案内いただいて伺ってきましたので、まずはその様子をお届けしたいと思います。

【工房訪問:「布の工房」nui project】

○福森 じゃあ、nuiに。

○佐藤 はい。

〔ドアが開く音〕

○佐藤 おじゃまします。

○佐藤 こちらが「布の工房」になりますね。

○福森 はい。

○福森 そうですね。今、nuiと言っていて、nui projectというサブタイトルをつけていますけども、布の工房ですね。

○佐藤 非常にやっぱりnui projectは、このしょうぶ学園さんでも有名なプロジェクトの1つですよ。

○福森 そうですね。最初の開設からある工房で、「布の工房」というのは、1992年ぐらいからちょっと刺繍に特化しようということで、nui projectというサブネームをつけたんですけども、最初は大島紬とかの下請けの仕事をやっておりまして、現在は、織りもちょっとやっていますが、自由創作が基本になっております。

○佐藤 何かここはすごく天井の高い、三角形の屋根の空間の工房ですけど、たくさん机が並んでいて、そこでそれぞれ皆さんが制作していらっしゃいますね。

○福森 そうですね。自分の好きなことを好きなタイミングでやりますから、ちょっと手を休めたり、ちょっと集中したり、その人のペースで仕事をする。ほかの工房も一緒なんですけど。そういう自由な中から生まれる自然な想像力みたいなものを支援員がキャッチして、そこをピックアップしていくというのがメインの考え方なので。

特に、ここはnuiという、縫うということに特化して、縫うといっても普通に縫うという概念から逸脱して、もつれたり、絡んだり、破ったり、それも縫うという範疇の中で、布と糸を使って何かを表現するというのが大きいテーマになっていて、それを製品に加工したりしていくのを職員がサポートするという役割になっている工房です。

○佐藤 見てみると、今も職員の方が各利用者さんのところに行って、少し見ながら、お話しした

りしながらやっていますね。

○福森 そうですね。まともになにか横について支援するというよりも、横目で感じながら、何か面白いことをやっているよねみたいなことに気づきながら、あるいはつまらなそうにやっているなどか。

○佐藤（笑）

○福森 元気だなとか、そういう創作の空気を見ながら、自分もマシンをかけるみたいな。なかなか両刀遣いで難しいんですけど、その利用者の創作の姿勢の空気というのが、全体のスタッフも含めて、ものを作るという一つのくりになっているという感覚なんですね。ですから、一人が1つのことに集中するというようなことは、スタッフはなかなか難しいんですけど、その空気の中で自分はどう作るかというようなことも大事な一環としているわけですね。

【皆さんの制作を拝見①:木戸竜聖さん、島田瑛代さん、不笠武志さん、藤村直樹さん】

○佐藤 うんうん。じゃあ、ちょっと工房の中を歩いてみて、皆さんの様子を少し拝見してみようかな。

○福森 おはよう。イヤホンをしているって。

○佐藤 おはようございます。

○福森 あっ、木戸君、ここにいる、今日。

○佐藤 おはようございます。

○木戸竜聖 おはようございます。

○福森 おはよう。取材に来ました。

○木戸 あ、はい。

○福森 昨日は陶芸でしたね。どうですか、調子は。

○木戸 ああ、いいですよ。

○福森 何をやっているんですか。

○木戸 ああ、糸巻きですよ。

○福森 いつも？

○佐藤 糸巻きか。

○福森 木戸君はさ、いつ入ったんだっけ。

○木戸 自分でも、普通通りに……

○福森 今年？ 去年だよ。学園自体にね。去年ですよ？

○酒匂美智代(職員) 去年ですか？ 入所が。

- 木戸 ああ、はい。
- 佐藤 じゃあ、いろんな工房も、1つだけじゃなくてね。
- 福森 テンションが低いですね。今日ね。
- 東 ^{ひがし あい}愛(職員) さっきテンションが高かった。
- 佐藤 ちょっと緊張しちゃったかな。
- 福森 ね。いつも高いんだけどね。
- 福森 今日はシャイかな。テレビカメラはないから。
- 佐藤 カメラじゃないから、大丈夫。音です。
- 福森 僕が前に住んでいたところの隣に住んでいたんですよ。
- 佐藤 ああ、そうですか。へえ。おうちが？
- 福森 ね。
- 福森 それで、隣の部屋だったんで、ヤッホーといつも言ってね。
- 佐藤 そうなんですね。すごい。(笑)
- 福森 ベランダで顔が合ったりしてね。
- 佐藤 (笑) その頃からの付き合い。
- 福森 そう。テンションが上がらないですね。(笑) 今日ね。
- 佐藤 やっぱり、真剣な感じ……
- 東 真剣モードだ。
- 酒匂 急に静かになる。
- 福森 急に。取材と分かっているからね。ああ。
- 佐藤 やっぱりね。何か無言の緊張感を与えてしまっている。
- 福森 おっ、久しぶり。昨日も来たけど、島田さん。
- 佐藤 おはようございます。
- 福森 どう？ 何を作っていますか。
- 島田瑛代 タグ。
- 福森 ちょっとインタビューの方に教えてもらっていいですか。
- 佐藤 何を作っていますか。
- 福森 タグと今言っていたかな。
- 佐藤 何か今、糸を。紙の。タグなのかな。nui工房の商品につけるタグかな。
- 福森 どうですか。楽しいですか。

- 佐藤 でも、楽しそうにというか、すごく真剣にやっている。(笑)
- 酒匂 今、しゃべっていいよ。おしゃべり。
- 佐藤 うん。
- 酒匂 何をしていますか。
- 島田 裂き織り。
- 福森 ああ、裂き織り。
- 佐藤 ああ。
- 酒匂 分けていますね。
- 島田 これ。
- 酒匂 裂き織りのタグ。
- 島田 これ。
- 福森 ああ、セットね。
- 佐藤 ああ、そうか。それぞれの商品によってタグが違うんですね。
- 酒匂 しっかりと分けてくれます。
- 佐藤 糸も違っているみたいですね。なるほど。これもだから、タグも単なるタグじゃなくて、いろいろと柄もあって面白いですね。
- 福森 うん。決まった仕事をルーティンでするのは得意なので。
- 佐藤 それぞれの人に合わせて…
- 福森 そして、幾つかの数を幾つか済ませて、すっきりして、今日は終わりみたいな。
- 佐藤 集中できますもんね。
- 福森 そうですね。
- 武志君、お客さん連れてきた。
- 不笠武志 うん。
- 佐藤 こんにちは。
- 福森 見て。
- 不笠 うん。
- 佐藤 おはようございます。
- 福森 どう？
- 不笠 うん。
- 福森 見せてあげてよ。こんなのをしている。この人もすごく、作品はすごいんです。

- 佐藤 へえ。今、刺繍の、毛糸かな。いろんな色の毛糸で刺繍をしていますね。すごい。
- 福森 どうね。
- 佐藤 すごく刺繍を、一つの部分にたくさん。
- 福森 もうすぐ終わる？
- 不笠 うん。
- 福森 残糸を切るでしょう。残糸を切ったのを箱に集める。それで、この箱に集めた残糸が1メートルぐらいになるんです。
- 佐藤 高さが？(笑)
- 福森 高さが。作品は10センチメートルなんだけど、残糸は1メートルぐらいになるっていう。
- 佐藤 残糸のほうが多い。(笑)
- 福森 僕らは残糸のほうを見てしまうというね。
- 佐藤 (笑) 確かに両方が表現みたいに見えますね。
- 福森 どう？
- 佐藤 そうか。じゃあ、要るものだけ使ったら、あとは要らないっていうか。そうかそうか。そういうふうには結構細かく切っていますね。ちょっと見られるのがプレッシャーになっちゃう。(笑)
- 福森 直ちゃん、また来ました。
- 佐藤 こんにちは。すごく笑顔が。(笑)
- 福森 彼も50年、学園で暮らしています。
- 佐藤 ほぼ、じゃあ、だから初期から。
- 福森 ああ、最初の開設からずっといらっしゃる方で、刺繍のパターンは大体こういう感じで、大きい布に丸を描いて、全部ドットの刺繍なんですわ。
- 佐藤 それぞれ何か違う色で。
- 福森 色は好きなのを、ここに置いてあるのを選んでやるんですけど、集積された作品はやっぱりすごい。ドットの集合なので。
- 佐藤 ドットの集合ですね。
- 福森 どう？ 直ちゃん、調子は。調子はどうですか。
- 藤村直樹 よかです。
- 福森 よか。
- 佐藤 よかですか。
- 福森 ああ、よかですね。よかった。

- 佐藤 すごく太い毛糸用の針をすごく巧みに、スムーズに動かしていらっしゃるんですね。やっぱり慣れてる。
- 福森 最初の頃はしていないですけど、でも、ほぼ、30年以上。
- 佐藤 このスタイルで。
- 福森 同じパターン。デザインは1つ。
- 佐藤 そうですか。このドットのスタイル。
- 福森 ドットの刺繍ですね。
- 佐藤 へえ。でもね、やっぱり同じドットといっても微妙に、刺繍していく中で形が、いろいろ表情が出てすごく面白いし、色も選んでらっしゃるんだと思うんですけど、青とか赤とか。
- 福森 まあ、色合いを見ているというより、偶然的なものもあるけど、視覚的に色を変えようかみたいな意思是当然あるので、あまり考え過ぎずに進んでいくというのはナチュラルでね、作品に関していやらしさがないですよ。
- 佐藤 何かストレートな感じというような。
- 福森 そうそう。作品を完成させようという気持ちがほとんどの方にはないので、行為を楽しんでいるということだと思うんですけどね。
- 佐藤 最後も結んだり。最後は結ばないで切るというのもね、面白いですね。
- 福森 直ちゃんは結ばないのかな。
- 酒匂 結びます。
- 福森 ここを結ぶの？
- 酒匂 まとめちゃって、最初でやって。
- 佐藤 ああ、最初にやっけていらっしゃる。そうかそうか。それで、最後は…。
- 酒匂 最後は結ばない。
- 佐藤 結ばない。それが何かいい。
- 福森 結ばないよね。次に絡んでいくので、それでそのまま飾るから。
- 佐藤 絡んでいくんですね。いいね。それが面白いなど。最初はすごく大きな玉結びで。
- 福森 そうそう。だから、結ぶということとか、玉結びするとか、真っすぐ縫うとか、そういうテーマからはもう逸脱しているの。
- 佐藤 うんうん。その時々というか。
- 福森 糸と布でどうするかというテーマにしているので、玉結びをしようよとか、ほどけるよとか、そういうのはアートの概念の中には全くないですね。

○佐藤 それをだから、そうしましょうということとかも、もうしないで、お任せしているということですよ。

○福森 そうですね。でも、導入時は「はて、どうしようか」みたいな状況があったら、ちょっとヒントを与えるようなアプローチとか、糸をいろいろ置いてみたり、丸を描いたり四角を描いたり、ちょっとしたものに本人が興味を持ったものに食いついたら、それはもうスタートとしては大成功なんですけども。

○佐藤 だから、単に放っておくというのとは全然違うと。

○福森 やっぱりその人に向いた素材とか、あるいは作業をする場所、実は僕らも相当環境というのは大事なんです。

○佐藤 そうですね、私たちも。

○福森 それは、空間的な場所もあるし、光の入り具合もあるし、あとは集中できるように閉鎖的であったり、あるいは開放的であったり、隣の人が好きか嫌いとか。

○佐藤 そうですね。(笑)

○福森 そういう条件をある程度整えるのが僕らの仕事で、あとは自分で手が動き始めれば、もうそれを見守っていくという。だから、最初の見つけ方みたいなものは、こちらの感性が問われるというところがありますよね。

○佐藤 そうですね。本当に大きいと思います。

○福森 ありがとうね。

○佐藤 ありがとうございます。

【皆さんの制作を拝見②: 池山麻智子^{いけやま まちこ}さん、吉本篤史^{よしもと あつし}さん】

○佐藤 おじゃまします。

○福森 池山さん、また来ました。

○佐藤 あっ、おはようございます。

○福森 教えてあげてもらっていい？

○池山麻智子 おはようございます。

○佐藤 おはようございます。

○福森 今日はどれをしたの。どれを？

○池山 今はこれとこれ。デイ(サービス)でこれを作った。

○福森 これ？

- 池山 作った。
- 佐藤 何か糸が変わっている。
- 福森 これを何に使うの？
- 池山 ブローチにしよっかと。
- 福森 ああ、ブローチにするの。
- 佐藤 ああ、ブローチ。
- 福森 これは。
- 池山 これも。何かブローチとこうやってひっつけて、こういうふうに。
- 福森 ああ、こうして？ こうして？ こうして？ ありがとう。
- 佐藤 (笑) ああ、もらっちゃう。
- 福森 まだ？(笑) それで、バッグにしたり、これは何にするの。
- 池山 これもバッグにしようかと思って。
- 福森 いいねえ。
- 池山 タコ糸でしないから。タコ糸で。
- 福森 これはタコ糸なの？
- 池山 タコ糸。
- 佐藤 ああ、タコ糸で？
- 福森 猫はどうしたの？
- 池山 猫はしていない。
- 福森 今はしていないの？
- 佐藤 すごく布にたくさん刺繍されたものが机にいっぱい重なっていて、周りは多分作品がずらっと。
- 福森 あなたのこの作業スペースの周りの壁に作品を飾っている。あなたが自分で飾ったの？
- 池山 いや、先生に飾ってもらった。畠中さんやら。
- 福森 ああ。飾ってあるね。どれが好き？
- 池山 みんな好き。
- 福森 みんな好き。(笑) だよな。
- 佐藤 みんな好き。(笑) それが一番、やっぱり。
- 福森 自分で縫っているの。
- 池山 はい。

- 福森 バッグも。
- 池山 はい。
- 福森 さすがですね。
- 佐藤 さすが。
- 池山 酒匂さんにミシンで縫ってもらって。これなんか酒匂さんに。
- 福森 ああ、つけてもらったのね。
- 池山 ^{かんだ} ^{いくえ} 神田(育絵)さんに縫ってもらって。これ、東さんに。これも。
- 福森 ああ、このミシンのところ？ 縫ってもらったの？
- 佐藤 うんうん。なるほどなるほど。
- 福森 ちょっと模様を手伝ってもらった。
- 佐藤 部分的にミシンとかで職員の方に。
- 池山 これは機織りを昔した。
- 福森 機織りをしていますね。
- 池山 レストランのコースターを作ったんです。
- 福森 コースターとかを作ってね。
- 池山 ずーっとやってた。
- 福森 池山さんも最初からだもんね。
- 池山 最初から。
- 福森 学園。50年だよ。
- 池山 50年。
- 佐藤 50年、すごい。(笑) レジェンド。
- 福森 ベテランですよ。
- 佐藤 ベテランの風格が。
- 福森 どう、刺繍になってよかった？
- 池山 よかった。
- 佐藤 あっ、握手。(笑)
- 福森 またよろしく。
- 池山 はい。
- 福森 ありがとうございます。
- 佐藤 よろしく願います。すごい、目に飛び込んでくる感じがすごい。

- 福森 こちらが吉本篤史くん。篤史くん、おはようございます。
- 吉本篤史 おはようございます。
- 福森 元気ですか。
- 吉本 はい。
- 福森 よろしくです。
- 吉本 よろしく願います。よろしく願います。
- 佐藤 よろしく願います。
- 吉本 よろしく願います。
- 佐藤 園長と握手をしていらっしゃる。
- 吉本 よろしく願います。
- 福森 無理やりしてもらっています。(笑)
- 佐藤 (笑) でも、コミュニケーションですね。決まり。
ここは、吉本篤史さんのお部屋というか、スペースで。
- 福森 はい。ここはもうアトリエと言っていいスペースで、個室で、5メートルぐらいの部屋を使っ
てもらって。でも、ちょっと足りないかなというぐらい広げてね。
- 佐藤 確かに。床にたくさん布片というか、がたくさん。
- 福森 そうそう。5センチメートルぐらいの布に並縫いを一部して、それを繰り返していく。それか
ら、糸を糸で結んで、結び目を楽しむみたいな。篤史くん。篤史くん。
- 佐藤 集中している。
- 福森 これは何ですか。
- 吉本 はい？
- 福森 これは何ですか。
- 吉本 うーん。作品ですね。
- 福森 作品ですね。
- 吉本 作品ですね。
- 佐藤 赤い糸が。
- 福森 触るなど言っている。
- 佐藤 (笑) 触らないでと。
- 福森 はい。やっているものに触ったら、ちょっと。
- 佐藤 (笑) ちょっと注意が入る。

○福森 もちろんそうでしょうけどね。でも、僕らに何をしているかはなかなか分からないけど、ある一定のルールの中で、繊維ということにかなり固執しているんです。だから、もうリアルにファイバーワークなんですよね。

○佐藤 うん、そうですね。

○福森 だから、繊維ということに関してこだわりが強いので、衣類も繊維だから、衣類を引き抜いて糸にしたり。それは、破って破壊するという行為じゃなくて、糸が必要だから、糸を取り出すという作業なんです。だから、言葉としては、衣類を破るじゃなくて、糸を引き抜くと言ったほうが正しいというのに途中で気づいていく。そうすると、それは肯定されていくので。社会的に問題行動という感じで、衣類を引き裂いて糸を抜くんで。でも、実際は糸が欲しいという、そういうことから始まって、吉本さんはもう。

○佐藤 「あしたのおどろき」の展覧会でも。

○福森 そうですね。

○佐藤 このタイプとはまた、だから前のタイプというか、平面的な作品を展示させていただいたんですが、やっぱり結ぶということは変わりがないですね。糸を結ぶという。

○福森 そうですね。一つの布に対して、作品というか自分の表現を入れ込んできて、それを額に入れて、僕らがそれを鑑賞するということではできていたんですけど、今はそこからはみ出して、一つの布ではなくて、一つの空間の中で繊維と遊ぶみたいな感じです。

彼は学園にもう26年いるので、最初は衣類を破るところから入って、それが肯定されて、今は衣類というか表現活動としての第一人者というふうになるぐらい、福祉の感覚というのと人間性を見る芸術的な感覚というのは紙一重なんです。それを表現してくれている彼で。それで、このスペースがあるこの時間というのは、多分本人にとっては至福の時間で、いい空間だと思います。

○佐藤 そうですね。すごげいたくというか、その空気に包まれているという感じで。やっぱり、あと薄い布に関心があるという、繊維と遊ぶ、繊維を見て楽しんでいるだけじゃない、何かを考えているというのが分かるし、自分の興味というのは結構やっぱり明らかというか。興味なのか、何かフィットするとか。

○福森 5センチぐらいの布の一边だけを縫うという、そのルールの解釈というのは僕らには難しいけど、彼はその一边を縫うということが1つのカテゴリーで、それを続けていく。ただ、あるときはまたそのパターンが変わって、1つのピースを半分に折って、それを並べるということが続けたりとか。ずっと突き詰めて見ていると、僕らにも多分そういう衝動があるんじゃないかと。でも、僕らは、

そういう衝動があったとしても、そこに理由づけがないとできないみたいなのところがあって。

○佐藤 うん、確かに。(笑)

○福森 したいからやるみたいなのところの、ダイレクトな自分の欲求に対する行動というのは、尊敬する部分に変わっていきますね。逆に言うとね。

○佐藤 どうしても説明したがっちゃう、しなきゃいけないんじゃないかみたいな気持ちがある、私自身もそうですけど、やっぱり癖になっちゃっているところがあったりして。

○福森 そう、やることの意味が、理解できるということから始まっていったら、芸術は成り立っていかないからね、やっぱり。でも、彼は芸術とかは意識していないから。

○佐藤 こちらは芸術として。

○福森 うん、彼は普通に。彼の普通は、僕らの驚きみたいな。

○佐藤 うんうんうん。本当ですね。

○福森 だから、お互いがそれを認め合うと、空間としてはいいでしょうね。否定されないからね、お互いがね。

篤史くん、ありがとう。

○吉本 ありがとうございます。

○佐藤 ありがとうございます。

○福森 失礼します。

○吉本 失礼します。

○佐藤 はい、失礼します。(篤史さんの)スペースから。(笑)

【皆さんの制作を拝見③:野間口桂介さん、櫻井えみ子さん、宮内まさ子さん、今村民子さん】

○福森 でも、スタッフは基本的に物を作るという方向にいて、利用者の作品に感化されながら自分の作品を作るという感じで。まあ、みんなそれぞれに向かっているという感じですね。

○佐藤 そうですね。こちらも、バッグとかね。いろいろ作っていらっしゃる。

○福森 桂介くん、また来ました。おはようございます。

○野間口桂介 おはようございます。

○佐藤 おはようございます。

○福森 桂介くんの作品を展示してくれた方です。

○佐藤 はい。昨日も来ましたけど。はい。

○福森 見せてもらっていいですか。

○野間口 ……

○福森 ちょっと貸してもらっていいですか。

○野間口 ……

○福森 駄目ですか。ああ、駄目ですね。

○佐藤 でも、見えます。(笑) ね、野間口さん。

○福森 大体端切れを全部集めて、それを縫う。長い糸は使わないですね。

○佐藤 長い糸は使わなくて、結構、だから何センチぐらいかな。20センチぐらいの布に密集した刺繍ですね。

○福森 幅1センチぐらいでね、色がカラフルにつながっていくんですけど、大体この色の順番は、全てにおいて同じなんです。

○佐藤 あっ、そうなんですか。

○福森 ほかの布を持ってくると、ほぼ99%、紫、緑、薄緑、ピンクとなっているんです。

○佐藤 ええー。

○福森 ルールがあってね、それをこのサイズにやるというのが最近のパターンで、以前はシャツに全体にやって、刺繍を。やっぱりそのルールがそこに入っているんですけど、そのシャツに大体4年ぐらいかかるんですね、1枚のシャツというのに。

もうシャツにはやらないの？ 桂介君。やりませんか？

○野間口 やりません。

○福森 はい。

○佐藤 やらない。新しいスタイルに、自然と。

○福森 やってみてくださいよ。

○野間口 ……

○佐藤 ちょっと緊張しちゃったかな。

○福森 酒匂さん、終わったのかな。

いや、緊張はしていないと思います。

○佐藤 終わった？

○福森 もう終わっているの？

○酒匂 いえ、まだ途中です。

○福森 ああ、途中。

○酒匂 最後までやったら、ぐるぐる巻きに。

- 佐藤 巻きにするんですね。
- 福森 合図があるわけね、最終に。
じゃあ、またね。失礼します。
- 佐藤 ありがとうございました。
- 福森 櫻井さんだ。こんにちは。
- 佐藤 こんにちは。
- 福森 また来ました。
- 佐藤 これは結構、なるべく大きいステッチの刺繍。
- 福森 自分で考えてやっているんでしょう？
- 櫻井えみ子 はい。
- 福森 どう、nuiは？
- 櫻井 大丈夫。
- 福森 大丈夫。いい。体の調子は？
- 櫻井 大丈夫です。
- 福森 今、いい？
- 櫻井 はい。
- 福森 気をつけてね。
- 佐藤 大きい。人によってやっぱりだから、当たり前なんですけど、刺繍の大きいのがいいのかな。
- 福森 大胆というか、大きいタッチでね、2センチぐらいの並縫いをしていくんですけど。
- 佐藤 うんうん、並縫いですね。
- 福森 横の人の影響を受けないんで。だって隣の方は1ミリ単位の仕事をしているけど
- 佐藤 そうですよ。(笑) 確かにね。
- 福森 こっちは大きい仕事だけど、全員が違うので、周りを見ないというところでさえもすばらしいと思って。
- 佐藤 うんうん、本当ですね。
- 福森 ありがとう。
- 佐藤 ありがとうございました。
- 福森 ここが織りのお二人でございます。今村さん、民ちゃんと宮内さん。
- 佐藤 おはようございます。

○福森 昔はね、大島紬をやっています、それはもう40年ぐらい前です。30年、40年前。下請けで大島紬の機織りをお二人ともして。

○佐藤 ああ、お二人とも。じゃあ本当に最初から。

○福森 それで、このnui工房の最初のスタートというのは織りなんです。20台ぐらい機織り機がありましてね、みんながばったんばったん、ばったんばったんやっていた工場みたいになっていましたね。それが今は2つに減りましたけれども、これはもう下請けじゃないので、裂き織りというので、コースターとかテーブルセンターとか、そういう製品を織っていただいている二人ですね。

どう、宮内さん？

○佐藤 (笑) 笑顔が。機織り機の中から笑顔が出てきた。

○福森 聞いてみてください。

○佐藤 はい。

○福森 グループホームで暮らしているんです。

○佐藤 いかがですか。何かきれいなお色ですね。紫とか。

○福森 たてつけができるので、しているんですけど。何を作るやつ？

○宮内まさ子 バッグ。

○福森 バッグか。

○佐藤 バッグですか。

○福森 バッグになる布か。

○佐藤 すごく細かい、細かい作業ですね。

○福森 今、おさに通して、たて糸をセッティングしているところで。

今日終わるかね。明日までかかるかね。

○佐藤 (笑)

○福森 そのぐらいの仕事ですね。

○佐藤 そうですか。

○福森 大島紬だと、もっと小さかったもんね。

○佐藤 ああ、そうですか。

○福森 絹だったから。今は綿糸なんで、ちょっと広いですけども。それでもこんなに細かい仕事。

○佐藤 細かいですね。

○福森 だから、自由に創作するというエリアと、決まったものをして製品化するという、その人の目的に合わせた作業のプログラムが出来ているという感じですね。

- 佐藤 こちらの裂き織りのほうは、よこ糸が布を細く切ったものですかね。
- 福森 裂いたものですね。はさみじゃなくて、手で裂いていく。
- 佐藤 そうなんですね。少し糸が出ている感じが表情になっていいですね。
- 福森 まあ、昔の人の知恵だから。再生布なので、古くなった着物とか洋服を裂いて、それをよこ糸にするという。
- 上手なんですよ。ね、民ちゃん。どう？ グループホームはどうですか。
- 今村民子 面白い。
- 福森 面白い。ああ、よかった。料理もするの？
- 今村 いえ。
- 福森 料理は世話人さんが。
- 今村 はい。
- 福森 今、97だからね。僕の家隣なんです。
- 佐藤 ん？
- 福森 隣に住んでいるんです。
- 佐藤 あ、本当ですか。
- 福森 1軒の住宅に、4人で住んでいる。
- 佐藤 4人で。ああ、そうですか。それで、お昼はこちらに来て、この裂き織りをなさって。
- 福森 そう。お仕事をして、ホームに帰って、土曜日・日曜日は自由な時間があるから出かけたりにして。それで、隣なので。
- 佐藤 日常的にコミュニケーションをしている。
- 福森 日常的に聞こえるもんね。「あー」ってね。
- 佐藤 (笑) 声が聞こえちゃう。
- 福森 そうそう。声が聞こえるんです。
- 福森 ありがとう。
- 佐藤 ありがとうございます。

【nui projectのシャツ】

- 福森 これは、シャツが。刺繍した、在庫。
- 佐藤 シャツですね。このnui projectの1つの代表的なシャツがたくさん並んで。すごく、普通のシャツに施される、一般的に売られている刺繍の量とは本当に違う、それぞれ密度のある刺繍が

施されていて。

○福森 メンバーの利用者の方が全てやって、スタッフが手を入れないこういうものとかもありますけど、半分以上はスタッフと合作になっていて、利用者の方がちょっとやった刺繍を取り込んで、ミシンで職員が入ったりとか。だから、スタッフの人が8割ぐらいって、利用者の方が2割ぐらいの質量のものもあれば、100%のものもあるし、どちらがどちらというのはスタッフとの関係ではないわけなんですね。

○佐藤 スタッフの方がされたところも非常にデザイン性のあるというか、だからやっぱり一緒の空間にいて、何ていうんでしょうか。

○福森 何かどっちかがどっちかを支えるという感覚じゃなくて、自分は自分なので、それを組み合わせ、一応人が着られるというものになっていくので。

○佐藤 何か共にあるという感じというか、どっちがどっちという。

○福森 どちらかという、力が入っているのはスタッフです。

○佐藤 (笑) 力を入れちゃう。

○福森 利用者のほうは、もう本当に平常心。職員は、負けてたまるかみたいな感じで入ってくるんで。

○佐藤 (笑) ちょっと頑張っちゃう感じで。

○福森 頑張っちゃうって、「私がやったんだし」みたいな評価を気にするからね。その関係も僕らから見たら分かりますね。ただ、利用者というのはいつもと同じで、「ああ、シャツにやるから、売るから何か頑張ろう」とかそういうのじゃなくて、ふだんどおり。職員はちょっとよそ行き。(笑)

○佐藤 (笑) 気合いが入っちゃう。

○福森 そう。

○佐藤 それがいい。

○福森 まあ、それが自然。それも両方自然なんですけどね。

○佐藤 そう思います。

○福森 だから、僕らはいかに自分だけのために作品に向かうということが難しいということを感じますよね。

○佐藤 それがあらわになるということですよ。

○福森 うん。狙っていくから。

○佐藤 そう、狙っちゃいますよね。ちょっとね。やっぱり見せるとか、意識をしてしまう。

○福森 工房でのキーワードなんですね。狙うということは、もうちょっとという目的があるというね。

明確なですね。だから、そういう意味でいくと、目的を持たないというか、縫うだけというのは目的がないわけじゃないけど、縫うという目的があったり、楽しむという目的があるけれども、この作品をどうするんだという目的はないので、その違いがいいのか悪いのか。

○佐藤 その違いが出るというかね、スタッフと一緒にいると。

○福森 そうですね。結果として出るし、それはお互い狙っているところもかっこいいし、デザイン的に。狙わない素朴性もすごくいいし。まあ欲張りというか、それを合わせていって、やっと一つの工房しょうぶのオリジナリティーが出るという感じはありますね。

○佐藤 それがやっぱりオリジナリティーなんじゃないかなと。

○福森 障害を持っているからやっていることが全部美しいと、そんなことじゃないですよ、基本的にね。行為そのものはきれいだけれども、じゃあ作品としてどうなのかとなったときに、狙いがあったり、なかったり。

○佐藤 そこはだからやっぱり見極めるというか、スタッフとかが一緒にいるんだけど、いるだけじゃない、観察したりして、見て、それを見ることを極めるじゃないけれども。

○福森 だから、このクオリティーのものを作ろうねということは、僕は言わないんですね。「ああ、こういうのが出来たんだね」という話になるんですね。で、それがどうなんだろうと。もっと感動したいなという欲望がやっぱりあるし。それをずっと積み重ねていって、2年に1回ぐらい、シャツだけに関しては、nui projectのシャツ展というのは、一応作りためて、2年に1回ぐらいやっているという感じで。彼らのペースで仕事をして、彼らのペースで展示会を入れていくという形ですね。ですから、時間がかかるので、場合によっては1年ぐらい一つのシャツにかかるし、場合によっては4日ぐらいで済む人もいますね。

○佐藤 それぞれのペースで。

○福森 そうです。速ければいいということじゃないのでね。

いかがですか。(笑)

○佐藤 すごいジャケットです。ステージができそうなジャケット。いいですね、キラキラして。(笑)

○福森 (笑) そう。ラメも入っているけど、すごいなというか。ステージ衣装じゃないけどね。

○佐藤 (笑) すごい。これはステージ衣装になるな。

○福森 それで、裏のほうはね、表はきれいにステッチされていますけど、裏は玉結びとかがあって。

○佐藤 本当ですね。でも、こっちも魅力的。

○福森 そう。裏のこの何ていうんですか。

- 佐藤 何ていうんだろう、ちょっとそのままな感じというか。
- 福森 そう。結び目があらわに固まっていて、ごっごつしている。
- 佐藤 うんうん。糸の端っこがね。
- 福森 これは裏はリバーシブルで着たりして、面白いと思います。
- 佐藤 面白いですね。
- 福森 ただ、制作者はあまり説明されないので、すごい。「終わったよ」と言って持ってくるけど、「おお」と言ってこっちは相当驚いているという感じがありますね。それで、「何でそんなに驚くの」みたいな顔をしているでしょう。
- 佐藤 (笑) ひょうひょうというか、淡々と。
- 福森 そう。それは、多分本人が「ただの私の表現です」ということでしょうね。
- 佐藤 その何も意識しない、結果的な潔さというのが気持ちいい。
- 福森 そうそう。奇をてらっていないし。うん。まあ、そんな感じですかね。
- 佐藤 そろそろ、次の工房に。
- 福森 はい。ありがとうございました。
- 佐藤 ありがとうございました。
- 職員の皆さん ありがとうございました。
- 佐藤 長々と。ありがとうございました。ありがとうございました。
- 職員の皆さん ありがとうございました。
- 佐藤 ありがとうございました。
- 職員の皆さん ありがとうございました。

〔引き戸が開く音〕

【しょうぶ学園の敷地を歩きながら：環境は大切】

- 佐藤 この敷地内を歩いているだけで、何かリフレッシュになっちゃいますね。
- 福森 そうですか。
- 佐藤 なっちゃうというか、私が。(笑)
- 福森 環境は大事だからね。
- 佐藤 環境は大事だなんてね。
- 福森 小さいスペースだけどね、世の中に比べれば。やっぱり外に出て隠れられたり、緑の小道を歩いたり、動物を見たりね。

○佐藤 そうですよ。いろんな自然のやさしい刺激がいろんなところに。刺激というのが、刺激という言い方は強いイメージがありますが、緑とか、動物とかに触れるというのは、やっぱり積み重ねは重要ですよ。

○福森 そうですね。まあ、計画的にやっていたわけでもないけれども、比較的カーブが多いので。

○佐藤 そうですね。景色が。

○福森 何ていうんですかね。一発で、見通しが全部いい、四角四面の環境というのも多いですけど、学園の場合は結構カーブが多いんです。その見通しが悪いということは、向こう側にちょっと期待を持たせるというのと、利用者のプライベートとしてはそんなに監視されないみたいな感覚を言葉じゃなくて体が多分体験するので。比較的一人になりたいとか、そんなにできないけれども、スタッフから見通しがあんまりよくないけど、でも少し存在は感じられるというような空間を目指しているんですね。

そのためには、やっぱり自然の木とか水とか、ちょっとしたスリットのガラスから人影が見えるとか、声が聞こえるとか、そういう自然の力を借りたような環境というのはいいんじゃないかなと思います。

○佐藤 うんうん。いや、本当にそう思います。普通に歩いているだけで、何かそれを体験しちゃうという感じ。(笑)